

# 幸福な食卓

2007(平成19)年2月25日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝小松隆志／原作＝瀬尾まいこ『幸福な食卓』（講談社刊）／出演＝北乃きい／勝地涼  
／平岡祐太／さくら／羽場裕一／石田ゆり子（松竹配給／2007年日本映画／108分）

## 第2章

禁じられるほど燃え上がる？

……「父さんは、今日で父さんを辞めようと思う」から始まる家族のプチ崩壊の様子は、再三登場する朝の食卓において印象的……？ 中3から高1という微妙な年頃の女の子を主人公に描く家族の崩壊と再生のドラマは、一風変わった転校生の男の子との恋模様を軸として丁寧に……。強烈なインパクトはないものの、今風ホームドラマとして結構いい出来の映画に……。

### ■教育の崩壊は家族の崩壊から……？

この映画を観たのと同じ2月25日（日曜日）の『サンデープロジェクト』は「教育再生会議」の提言を取り上げた。また、教育関連法案を検討している中央教育審議会は、同日「総会などを開き、学校教育法、教員免許法の2法案の骨子案については、大筋で了承し」たが、「教育再生会議の提言を受けて、異例とも言える急ピッチで審議を進めてきた中教審は、28日に関係団体からヒアリングを行い、週内にも答申をまとめる」と結論を持ち越した（2007（平成19）年2月26日付産経新聞）。

教育再生は安倍内閣の重要課題の1つだが、それは裏返せば学校における教育崩壊がそこまで進行しているということ。ところが、「学力低下、学級崩壊、悩む先生」という教育の崩壊は、学校だけの問題ではなく、実は家族の崩壊によるものも大きいはず……。

2007（平成19）年2月26日付産経新聞で、TOSS（教育技術法則化運動）代表向山洋一氏は、「授業中、立ち歩いている子を注意したところ、職員室で何時間も怒鳴り散らす親。朝早くから夜遅くまで担任や校長に電話をかけ、何時間も文

句を言う親……。それが何日も続く」という「Monsterペアレント」の問題を指摘し、「Monsterペアレントを放置していてもな教育ができるわけがない。ことは緊急を要する」と訴えているが、まさに同感！ 教育の崩壊は家族の崩壊からと考えると、世の父親、母親たちは自力での解決を模索しなければ……？

## 中原家は家族のプチ崩壊……？

東京渋谷区幡ヶ谷に住む歯科医の次男武藤勇貴による妹殺し事件をはじめ、家族の崩壊の極限状態を背景として生まれた犯罪が次々と報道されているが、この映画における中原家は、その初期段階のいわばプチ崩壊レベル……？

映画が始まると、スクリーンは暗いまま次のセリフだけが……。 「母さんが家を出て、ナオちゃんが農業をはじめ、父さんが父さんをやめた。それはいつも朝の食卓からだった……」。そしてその直後、スクリーン上に登場する父親と2人の子供（兄妹）の3人が揃った朝の食卓で、弘（羽場裕一）が切り出したのが、予告編で何度も観た、「父さんは、今日で父さんを辞めようと思う」というショッキングなセリフ。短いセリフだがその意味するところは奥深い……？

これに対する主人公の佐和子（北乃きい）のセリフは「はぁ？」と言うだけ。そして兄の直ちゃん（平岡祐太）の反応もほぼ同じ。さあ、中原家において中学3年生の佐和子は、高校受験に向けて勉強している普通の女の子だが、大学進学を諦めて突然農業を始めた兄の直、家を出て1人近くのアパートで生活を始めた母の由里子（石田ゆり子）に続いて、父親の弘までも、「父さんの役割」を放棄すると宣言。これでは、微妙な年頃の佐和子がグレていっても仕方なし……？

## ストーリーの骨格は転校生……

学校を舞台とし、小中高校生を主人公とした映画では、突然登場してくる転校生が大きな役割を果たすことがよくある。ちなみに、ハリウッド映画の『卒業の朝』（02年）や邦画の『時をかける少女』（06年）、そして韓国映画の『品行ゼロ』（02年）や中国映画の『玲玲の電影日記』（04年）などがそれで、この映画もそのスタイルを……？

佐和子の学校に転校し佐和子のクラスに入り佐和子の隣に座ったのが大浦勉学

(勝地涼)。勝地涼は『亡国のイーゴス』(05年)で如月行1等海士役を演じて強烈な印象を残し、第29回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞した若手有望株だが、1986年生まれだから14~15歳の中学3年生の役はちょっと難しいはず……？ しかし、そこは役者。年齢の違和感を最低限度におさえ、1991年生まれの当年16歳の北乃きいと仲良く同級生役を……。そればかりではなく、この2人の高校受験を軸とした恋愛模様とクリスマスプレゼントをめぐるクライマックス、突然の勉学の交通事故による死亡、そしてそれによる佐和子の心の喪失、がこの映画のストーリーの骨格……。おっと、重大なネタばらしをしてしまったかも……？

## 佐和子、直、そして勉学のキャラは……？

佐和子は気安く「直ちゃん」と呼んでいるが、兄の直は何でも1番。佐和子が目指している西校にトップで入り、大学だっどこにでも進学できるような秀才だったらしい。しかし、今の彼は家でギターを弾いたり、ニワトリを買ってきてクリスティーヌと名づけてその小屋をつくったり、と悠々自適の生活……。さらに、妹が見る限り彼の女関係はいい加減で、1カ月に1度彼女を入れ替えているらしい……？

これに対して妹の佐和子は、直のような天才肌ではなく、何でも真面目に努力していくタイプ。兄が入り卒業した西校へ進学するのが目下の目標で、よく頑張っているようだが真面目だけではどうも……？

他方、転校生の勉学は坂の上の高級住宅地に住む大金持ちの息子らしいが、おらかそうなナイスガイ……。もっとも、頭はあまり良くないことを自覚しているようで、隣に座った佐和子が直の妹であることを知った彼は、当面佐和子を目標として受験勉強していくと宣言……。

その他、さすが私と同じように二足のわらじをはき(?)、作家のかたわら(?) 京都府の中学校で国語教師として勤務している瀬尾まいこ氏だけに、中高生たちの観察眼はたしか……。そのため、直と佐和子、そして勉学のキャラがくっきりと……。

## 直の恋人ヨシコに存在感が……

ある日、佐和子が帰宅してみると、目下の直の恋人小林ヨシコ（さくら）が「おじゃましてます……」と軽くあいさつしながら、直らと仲良く食事中……。そんな時のヨシコの手みやげは、1度目はサラダ油、2度目は海苔。こりゃ明らかなにお中元、お歳暮の残りモノ……？

「実用的なものの方がいいと思って……」とヨシコは言っていたが、恋人宅へおじゃまする時、普通そんなものを持ってくる……？ これだけみても、ヨシコはかなり変わった奴……？ 直は1カ月に1度のペースで彼女をとっかえていたから、佐和子はどうせヨシコもそんなものだろうと思っていたし、私もそう思っていた。ところが、この映画ではヨシコが意外なキーウーマンとなり、大きな存在感を……。

ある日、ヨシコが直とは違う男の車から降り、キスを交わしている姿を目撃した佐和子が文句を言うと、ヨシコはあっけらかんと「恋人が2人いたっていいじゃない」と回答したから、佐和子は唾然……？ さらに、強引に佐和子に対して直の部屋を案内させたり、悲しみにくれている佐和子の部屋の中にズカズカと入り込んできたり……。言うこと、やることがかなり手前勝手に強引。ところが、実はこのヨシコは、佐和子に対して適切なアドバイスをしてくれた実にいいオンナ。中原家の家族の崩壊を救うについて、彼女が大きなウエイトを占めることになるから、その役割に十分注目を……。

## この世代の父親・母親の望みは……？

私は今58歳の団塊世代だが、直と佐和子の父親弘は40代後半、母親由里子は40代半ばという設定……？ この映画では、佐和子と同級生のボーイフレンド勉学との心の動きが物語の中心で、それに対する直とヨシコのフォローの様子がよく描かれている。

しかし両親については、佐和子に対するやさしさや気配りは当然あるのだが、それ以上に由里子の生き方、弘の生き方の方にウエイトがあり、母親オンリー、父親オンリーの役割を拒否し、そこから脱皮したいという望みが見えるところが

ポイント。団塊世代の両親には会社人間が多く、単一目標に向かって突き進むタイプが多いのに対し、それより一回り下の40代後半の両親は、あれもやってみたい、これもやってみたいという多目標人間が多いよう……？

もっとも、弘にとっても由里子にとっても家族は大切に、由里子は1人アパートに住んでいても朝の食卓の準備はちゃんとやっているようだし、弘だって父さんは辞めても受験生という肩書きで同居し、仲良く生活している。したがって、家族それぞれの距離感はほぼ同じで、濃さが変わったようなもの……？ その評価は難しいが、この世代の父親・母親の多くが弘や由里子のように多目標人間だとしたら、それに対応した家族のあり方が求められるのが当然だが……？

### クリスマスプレゼントの定番はマフラーだが……？

中学生や高校生レベルで恋人同士になると、クリスマスプレゼントとして女の子が男の子に贈る定番は手編みの手袋かマフラー……？ その例にもれず、佐和子が編み始めたのがマフラーだが、それも「今日からクリスマスの日までお前とは会わない。だってその方が会えた時の喜びが大きいから」という勉強の気のきいたセリフを受けてのことだから、楽しみも倍増……。多分佐和子は、生まれてはじめて、誰かのために何かをすることの喜びをかみしめながら編んでいたのでは……？

他方、勉強が佐和子へクリスマスプレゼントをするためにやり始めたのが、朝の新聞配達。裕福なお坊っちゃんがそんなことをやり始めたのは、「自分で稼いだ金でプレゼントしたいから」というこれも気のきいた動機から。したがって、クリスマス日の久しぶりの再会とプレゼント交換は、2人にとって最高の日になるはずだったが……？

### やっぱり交通事故が……？

幸せの絶頂にある2人を突然不幸のどん底に突き落とすために、小説や映画でよく使われるのが交通事故。交通事故は突然のことだから、それによってそれまでのストーリー展開を180度切り換えることが可能に……。したがって、小説家や映画監督としては、いかにそれをドラマティックに演出するかが関心事……？

昨日見た『天国は待ってくれる』（07年）も、結婚式当日花婿に起きた交通事故によってストーリー展開が180度切り換わったが、そこでは花婿は死亡ではなく植物人間状態になったから、ある意味ではよけい大変……？

しかし、高校生の佐和子にとって、かけがえのない友人兼恋人が突然この世からいなくなってしまうのははじめての経験だから、その喪失感に対する対応能力がないのは当然……。ましてや、根が真面目な佐和子だからよけい到大変……。

せっかく多少バラバラながらも、朝の朝食を中心として一定の家族の絆を保っていた中原家だったが、こんな危機を迎えて今後家族それぞれがどのように対応していくのだろうか……？ またそこに、多少大雑把だが人情味豊かなヨシコが、どのような役割を果たすのだろうか……？ それがこの映画後半のエッセンス。小松隆志監督はそれを丁寧に描いているから、じっくりと……。

## 今ドキのホームドラマとしては上出来だが……

昨日見た『天国は待ってくれる』も登場人物が良い人ばかりだったが、この『幸福な食卓』もそれは同じで、悪人は誰1人登場しない。またこの2作品とも、舞台やテーマが身近で、いかにもよくできた今ドキのホームドラマという感じ……。

しかして、『キネマ旬報』3月上旬号の「REVIEW 2007 Part 1」では、『天国は待ってくれる』は4人の映画評論家の採点が4点、2点、1点、1点と大きく分かれたうえ、トータル8点だったのに対し、2月上旬号の「REVIEW 2007 Part 2」では、『幸福な食卓』は3点、3点、3点、4点とほぼ全員高得点だし、トータルも13点と評価が高い。私もこれと同じで『天国は待ってくれる』は2点、『幸福な食卓』は4点としているが、その違いはどこにあるのか、皆さんもよく味わってもらいたいもの……。

もっとも現在この2本が上映されている梅田ピカデリーの観客はガラガラ。現在上映中の『墨攻』（06年）に続いて、3月3日からは『蒼き狼 地果て海尽きるまで』（06年）が公開される。ピフテキみたいな料理の合間にたまにはお茶漬けもいいのだが、似たりよったりの上出来のホームドラマだけでは、やはり飽きられてくるのでは……？

2007(平成19)年2月28日記